

夢枕に立った浄瑠璃姫 = = = 三州横山話より

明治三十年頃、村の早川熊十というものに、浄瑠璃姫が夢枕に立って、自分を信仰してくれれば、すべての願いを叶えてやると、三日続けてお告げがあったと言って、その一家の者が連れ立って、北山御料林内の笹谷にある姫の祠へ参詣したのから噂を生んで、さかんに参詣者が殺到したことがありました。

村の主立ったものは、毎日弁当持ちで祠の周りに笹などを敷いて詰めかけて、参詣者に餅を出したりして、新しく賽銭箱をこしらえるやら、幟を新調するやら大変な騒ぎで、どこからともなく見も知らぬ坊主が来て祠の脇に陣取って、蠟燭を売ったり祈禱を上げたりしました。県道から祠に登る道なども、たちまち四尺ほどの広さに踏み拡げ



られて、祈願のための紙幟が、白く幾重にも両側に続いて、食物店や、お土産を売る店が、軒を並べるようになりました。祠が御料林の中にあるので、警察からは毎日警戒の巡査が出張してきました。

明け方から暗くなるまで参詣の人は絶え間なく続いて、山の後から越してくる道も新しく出来ました。押し絵の姫の人形などを奉納する女もあって、早速それを間に合わせのお姿にしたりしました。

昔は祠に木彫りのお姿が入れてあったそうですが、村のものが、忘れていた頃に、横山の地続きの村のものが、盗み出して自分の家に祀っているのだと言って、今更のように口惜しがったのを聞きました。

村では毎晩遅くまで賽銭の勘定に忙しく、二十銭の銀貨があった、一日に五十円上がったなどと言いました。

それがいつとなくさびれて行って、一年後には、ぱったり参詣者が跡を絶ちました。

翌年の一月、賽銭の上がりで麓で神楽を催して、挽回策を講じましたが、さらに効力はなかったようでした。

古老の噺では、昔も斯様なことがあって、この時の流行はちょうど三回目だと言いました。

五十年前までは姫が結んでいた庵が、祠から少し降った所に残っていたのを記憶しているなどと言うものもありました。

伝説によると、姫は矢作の兼高長者の娘で、奥州へ去った義経の跡を慕って来て、ここに庵を結んでいて、果てたと言います。ときおり侍女を連れて芹を摘みに出た姿を里のものは見たと言います。祠のある笹谷を少し山を登った所をセリ場と言って、そこは姫が芹を摘んだ跡だとも言います。姫が臨終のおりの遺言に、宝物は全部笹谷の梅の木の根元へ埋めておくと言ったと伝えて、村のものなどは、正月の遊びの日などに、鍬をかついで、梅の木を探しに行ったものもあったそうですが、あいにく笹谷には梅は一本もないと言いました。

祠は石の小さなもので、天明年間に村の連中が建立したことが刻んでありますが、祠に乗っている石垣は、村の早川孫平というものが、その後独りで築いたと言います。その時、一人石垣を築いていると、どこからともなく、一匹の赤い蜘蛛が現れたので、石垣の前通りのみを築いて、側面は出来上がらないまま、中止したと言います。姫が夢枕に現れたのは、その男の孫だそうで、石垣を築いてくれた御礼に、姫が夢に現れたのだらうというような因縁話もありました。

笹谷の麓に住むものの話では、現今もときおり、非常な遠方から、婦人病に御利益があると行って、尋ねて来る女などがあるそうですが、祠へ通じた路なども全然破壊されてしまって、ちょっと近づけなくなっております。

ここから、50m程降ったところに祠があります。道標がなかったらちょっと分からないかも・・・。



追分の国道257号の入口から、浄瑠璃様まで約2kmあります。作業道なので関係者以外は、車の乗入はできません。

浄瑠璃様のお祠は、今は深い杉木立の中に没していますが、この当時は、シイ・カシ・ナラなどの広葉樹林で、木の実や山菜なども豊富であったと思われます。戦後雑木を伐採して杉桧の植林が始まり、現在のような林相になりました。

昭和30年頃が丁度植林の最盛期で、まだ植え込みが小さくて、日差しが山肌まで直接差し込んでいたので、春は一面の山イチゴで、30cm程の竹の籠を腰に付けて、山イチゴを採りに行きました。少し木が大きくなったところは、その木にジネンジョが巻きついて、秋になると今度は山芋堀に出かけました。

北山の御料林は、私達の子供の頃は官林と呼んでいました。「かんりんに行くぞ」が子供達の合言葉だったのです。